



Title	秋成における古今集仮名序の引用：『ねば玉の巻』から『春雨物語』「海賊」まで
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	国文学解釈と鑑賞. 2010, 75(8), p. 38-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48813
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

秋成における古今集仮名序の引用

飯倉洋一

—『ねば玉の巻』から『春雨物語』『海賊』まで

秋成と古今集

秋成は若いころ、京都の下冷泉家に伝統的な歌学を学んだ経験がある（『胆大小心録』）。それは『古今和歌集』（以下古

集とその序を書いた貫之への批評を繰り返し行つた。古今集の美学を払拭し乗り越えることが、秋成流の和歌観の自立てあつたと仮定した時、秋成の対古今集意識の検討は重要な課題となる。

伊勢物語の注釈書である『よしやあしや』や源氏物語論が主題の対象読物である『ねば玉の巻』を材料に秋成の物語論が繰り返し検討されたことによつて、また『雨月物語』をはじめとする秋成作品における夥しい典拠研究によつて、秋成と『伊勢物語』・『源氏物語』の関わりが深いことは常識になつてゐる。しかしながら古今集との関わりは、十分に論じられてゐるとはいえないのではないか。

明和九（一七七二）年に秋成の講義を藤打魚が筆記した

『古今序聞書』が成り、寛政元（一七八九）年、真淵の『古今歌集打聽』を校訂出版し、文化五（一八〇八）年、『春雨物語』『海賊』において古今集についての議論を描いたことなどがその手がかりとしてあり、生涯にわたって関心を持ち続けたテキストであることは疑えないものである。

筆者はかねてより、伊勢・源氏・古今集は秋成の創作意識に影響を与えた三大古典ではないかと考えている。秋成は、伊勢に「寓言」を、源氏に「めめしさ」を、古今集に「いつはり」を学んだのではないかと。「寓言」は自分の言いたいことをどのようにイメージ化し、あるいは蘆化して物語化するかという方法の問題であり、「めめしさ」は人の心の奥底の感情を清濁を問わず汲みあげて描きつくすかという表現の問題であり、「いつはり」は表現のために心のまことを裏切つていいかという倫理の問題である。

そこで本稿では、伊勢・源氏に比べて検討されることの少ない秋成の文学観と古今集との関わりを、とくに古今序の引用の検討を通して考えることにしたい。

中世的古今集観への疑惑——「ねば玉の巻」

卷』が最初である。『源氏物語』を二四回書写したと伝えられる連歌師宗椿が、夢の中で柿本人麿に会い、人麿の源氏物語批判を聞いて、書写行為を止めるという内容の物語である『ねば玉の巻』は、安永八（一七七九）年に成立した（ただし『上田秋成全集』第五巻の日野龍夫解題によれば、鍵屋文庫所蔵の秋成自筆本の筆跡は寛政中ごろのものと中村幸彦は推定している）。ここでは成立年を採る。従来秋成の物語論として扱われてきたように、本作品で人麿が『源氏物語』を批判的に論じていることはよく知られているが、後半に和歌についての宗椿・人麿の問答があることにはあまり注意が向けられていない。この和歌論において人麿は古今序を引用しているのである。

和歌についての問答は、まず中世的な文学観・和歌観を代表する登場人物として設定されている宗椿が「やまと歌こそ、やまと人の、国がらの直き心もて打出るものなれば、是にぞ有がたき事のきはめはあるよしにて、あめつちを動かし、目にみえぬおに神をもあはれと思はするとか。この歌や、ひとの国をしへも入たゝぬいにしへに、神も君もよませ給ふて、國治めまするいさ熱心をしるく、和歌の大神と申もおはしまして、此道守らせたまふ也。さるを是だに教へとせん

秋成が自身の虚構作品に古今序を引用したのは『ねば玉の

事、猶御心もゆかぬげに聞えさせ給へる。このことわりいかゞこころ侍らん」と古今序を踏まえて、和歌の道が政教と人倫に益するものであるかどうかを人磨に問う。古学的和歌観の代弁者としての人磨は、やはり古今序を引き、次のように答える。

既に貫之の詞に、「いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さむらふ人々をめして、事につけつゝ、歌を奉らしめたまふ。或は花をこふとて、たよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる、心々を見たまひ、さかしおろか也と、しろしめしけん」といへるは、またく人試みさせ給ふにて、是ぞ教へのふみにあらねば、後の世の歌をしる人の、此國の道々しきは是のみぞといふにはたがへるなり。

人磨は古今序に、「代々の天皇が、近臣を召して歌を捧げさせ、彼らの心を御覽になつて賢愚を判断される」というのは天皇が人々の才能を試しているのであって、道の在り処を教えようとしているのではない。古今集は「教えの書」ではないので、後世の和歌師匠が、日本の國の道らしい道は和歌にこそある、というのとは違つてゐると言う。

「いつはり」の発見——「吉野山の詞」

次に『吉野山の詞』という文章を挙げる。秋成は天明八年(一七八八)年に大和吉野の旅行をし「いははし」を書いたが、その際にものした句文が「吉野山の詞」である。その冒頭に、

吉野山の桜を、人まろの目に雲と見たまひしとは、古今

中世以来、敷島の道としての和歌は政教人倫に益するものとされた。たとえば東常縁から宗祇への古今集講釈の聞書である『兩度聞書』(室町後期)には、人磨の引いた部分を「此段上古有道の体なり」とし、花や月を賞するのに横道に入る者を「道の心にかなは」ぬものと解している。このように、中世的歌学観においては、古今集は和歌の道、ひいては政教人倫の道を体得するための基本的なテキストであつた。だが秋成は人磨をして、それに疑義を呈せしめる。歌の神である人磨がいうのであるから、この物語の中ではそれは重い発言となる。ちなみにこれは神仏に託して自説を述べる「重言」(萬言)の一つの方法である。しかしながら、晩年の『春雨物語』『海賊』に見られるようにあからさまな貫之批判はまだ見えない。

序中のまぎれ事に、博識の翁達は申されたり。「雪」とは友則の虚めぞ始なる。また「白雲とのみ」も、山籠りの法師が偽ならぬは、後撰集に載てあらはなりけり。

である。「吉野山の桜を、人まるの目に雲と見たまひし」とは古今序の「秋の夕、龍田河に流るる紅葉をば、帝の御目には、錦と見給ひ、春の朝、吉野山の桜は、人磨が心には、雲かとのみなむ覚えける。」の傍線部を引いたものだが、秋成が「古今序中のまぎれ事に……」というのは、龍田川の紅葉を錦と見立てた帝の歌は古今集にあるのに、吉野の桜を雲にたとえた人磨の歌はなく、なぜか「梅の花それとも見えずひさかたの天霧の雪の並べて降れば」の歌が注として挙げられているという不整合が、古來問題となつており、眞の歌を秘伝とするよなことも行われていたからである（京都大学国文資料叢書『古今切紙集 宮内庁書陵部藏』、臨川書店）。

なぜならば、古今序の先の引用部において、人磨が吉野の桜を雪と見たことが、人磨の心には眞実であつたのか、それとも人磨の見誤りを装つた虚偽であつたのかが、古今序注釈史上問題になつてゐるからである。

前出の『兩度聞書』には、

さて、文武天皇（「帝」を文武天皇と解している）人丸は是大聖也。如何ぞ紅葉をさきへて（曲げて）錦と見、桜ををして（無理に）雲とみるや。いつはれる心、大聖といふにたがふといへる難ありと也。更にいつはる心には侍らず、只にしきににたれば錦と見、雲にまがへば雲とながむる、これ大聖の心なり。（（）内飯倉注）

と述べられており、室町後期、三条西実枝から細川幽斎に講釈された古今集聞書の『伝心抄』（幽斎筆）、『古今序聞書』

集』春下一一七より人しらす）である。後者は前者の「改変か」（新日本古典文学大系『後撰和歌集』脚注）と言われるが、秋成は、友則の歌を「虚」といい、後撰集の法師（詞書よりわかる）の歌を「偽りならぬ」という正反対の認識をしていることが注目されよう。しかし、まず、桜を雪や雲にたとえることを眞偽の問題としてとらえる捉え方そのものを問題にしたいのである。

（智仁親王筆）もほぼ同文である。

秋成の脳裏にはおそらくその議論があつた。その議論の枠組みで、紀友則の、桜を雪に見まがつたという歌を「虚のはじめ」としているわけである。これは、吉野の桜が人麿の目に雲と見えたことは虚偽的修辞ではなく事実だと、秋成が前に古注釈書同様に認識しているということを意味している。そして「また「白雲とのみ」も、山籠りの法師が偽ならぬは、後撰集に載てあらはなりけり」とは、後撰集所載のこの歌についても、人麿と同じく眞実を述べた歌だと秋成は解しているのである。

秋成はなぜこのように考えたのだろうか。友則の歌には、「寛平御時きさいの宮の歌合のうた」という詞書がある。つまり、題詠であり、友則が実際に吉野に行つて詠んだわけではないのである。ところが、秋成の考えでは、人麿は帝に随行して実際に吉野に行き、桜を雲と見誤つたのであり、後撰集の作者も「大和にまかりて、程ひさしく待てのち」詠んだと詞書にあるから、実景を見て「白雲」と思ったのだというのである。

実景を読むか、題詠で読むかは、万葉調と古今調との相違の問題に発展するわけであり、秋成は古今集の撰者である友

則の歌に、古今集的な題詠歌に付きまとつ「いつはり」を嗅ぎ取つていたということなのである。

秋成は『春雨梅花歌文卷（仮題）』（文化五年）に、春雨を題に二つの連作をものしたあと、「けふはふり晴たれば、歌はいつはり言なりける」という。「春雨こからねど、けふもふる。物いひ残したるこゝちすれば、又よみける」と述べる以上、それは実景を前にした歌だつたはずなのだが、降りやんで青空が広がつたあとも詠み続けていれば題詠に近い。友則の歌を「虚」というのは、この認識と通じるものがある。

秋成の「いつはり」の発見は、仮名序の作者貫之その人の文学観・言語思想批判に連なることになる。

紀氏の口才——『金砂』

秋成が貫之に対する批判を明確に打ち出すのは、享和四（一八〇四）年成立『金砂』五である。『金砂』は万葉集評釈書であるが、その序に当たる部分に古今序を引用する。

古今集の序詞に、「人の心を種として、万のことの葉となれり」と書しは、万葉集に次でえらびしと云義を、心におきて書たる。その原は、万葉の題名をえらびし

は、葉の字、後漢の劉熙の釈名と云書に、哥の字の釈に、「哥は柯也」と云。心は人の言語は、草木の柯葉あるにひとしと云によれる也。この釈おのが私にすぎたり。

この『釈名』批判ののち、『舜典』の「歌者永言也」、「說文」の「歌者詠也」をよしとし、『釈名』に基づいた『万葉集』の命名を批判、それを受け継いで「万のことの葉」という語を捏造した貫之のさかしらで、以後「言語詞辭」を「皆ことばと訓釈する」ようになつたとし、「(中略) 噴、紀氏の口才をもて、後をまどはす事の悲しさよ。文字は道を乗する輿馬といへども、虚偽も亦是につきて走る」と断罪するのである。

秋成は、文字が道を載せる器であるとともに、虚偽を流通させるという危険を伴う諸刃の剣であることに強い懸念を示している。もつともこの断罪が秋成自身に後年返つてくることに彼はまだ気づいていないのであるが。

貫之の虚偽について、同じく『金砂』一では、

延喜の比となりんでは、土佐守なる人の、国にてかなし子を失ひ、帰る船路、家に來ても、たゞ其面影を、忘るゝひまなくおぼし乱るゝにも、世の人めゝしとや聞

覽、みらむど、女ふみのさまに書やつせしは、御代はみさかりに、人の心花にのみうつりては、まことの歎きをさへ、いつはり言するよど、おぼさるゝなりき。

と『土佐日記』の書きざまを槍玉に挙げて批判している。貫之が任地土佐で亡くした愛娘の面影を忘れる暇なく思い乱れているのを、世間の人が「めめし」と思うのではないかと恐れて、女の文体である仮名文で日記を書いたと秋成は解釈しているのである。私情や心の隅々を表現するための「めめし」き文体が『土佐日記』や『源氏物語』によつて形成されたと秋成がとらえ、それにアンビバレンツな思いをいだきながらも、「秋山記」などでその「めめし」き文体を実践していくことについては既に指摘したことがある(「めめしさ」の意味するもの—「秋山記」試論—「秋成考」所収)。しかし、ここでは「人の心花にのみうつりては」以下に注目したい。直接の引用ではないが、この部分は、古今序における、「今この世の中、色につき、人の心、花になりにけるより、あだなる歌はかなき言のみいでくれば」を承けているに相違ない。

『金砂』において、貫之の「いつはり言」は、赴任地で妻を亡くした大伴旅人が筑紫からの帰途その慟哭を率直に歌つたことと比べられている。秋成の中で、万葉IIまこと、古今II

いつわりという圖式が、旅人・貫之の比較によつて明確化していたのである。古今序のイメージは、古今序にいふ、僧正遍昭の「誠すくなし」に象徴的に示されていると秋成には見えていただろう。これは『春雨物語』『天津処女』の主題に繋がる。

古今序と罪——「海賊」

秋成は師宇万伎追善のために『土佐日記解』を何度も書寫した(一戸涉「秋成の校訂」『秋成文学の生成』一〇〇八所収、同「秋成と『土佐日記』——「海賊」論のために』『國語と國文學』二〇〇九年二月号に詳しい)。『春雨物語』の中で最も寓意が露わな一編で、登場人物の口を借りて披瀝される秋成の自説が大きな部分を占める「海賊」は、秋成の『土佐日記』への持続的な関心から生まれたといえる。同時に『土佐日記』で女を裝うという偽りをなした貫之という存在への関心も深められたに違いない。「いつはり」というイメージに彩られている古今集と『土佐日記』の生みの親として……。『土佐日記』的 세계の中で古今集を論じるという「海賊」の問答空間はこうして必然的に生まれ、そのテーマは偽りの指弾となるのであつた。

『土佐日記』で姿もないのに怖れられてた海賊を出現させ、紀貫之を批判させるという趣向の「海賊」で、古今序は、当然それと明示されつつ引用されている。

ぬしが序に、「やまとうたはひとつ心を種として、よろづの言の葉となる」 と云しは、文めきたれど、明かに誤りつ。言語詞辞は、ことぐことゝよむより他なし。

言のは、ことばともいひし例なし。积名によりて、題のこゝろを助くるとも、古言にたがふ罪、國ぶりの歌にも文にも見ゆるすまじきを、大臣參議の人々、己が任にあづからねば、よそめつかひて有しなるべし。

『金砂』における批判と同内容だが、「古言にたがふ罪」という言葉が出てきて、その指弾は攻撃的でかつ倫理的な色彩を帯びる。

さらに海賊は続けて「歌に六義ありと云ふは、唐士にても偽妄の説ぞ」という。「歌に六義あり」とは古今序の「そもそも歌のさまむつなり」を承けているが、「偽妄」という言い方もまた倫理的である。

秋成は、その著述人生において、いつわりを書くことが罪であるという認識と自覺を持ちつづけていた。『春雨物語』の序に既にその意識はあらわれ、ある時は他者への批判とし

て、ある時は自責の念としてそれは表明された。その罪意識を整理しようとしたのが、文化四（一八〇七）年秋、死の二年前の草稿投棄一件である。

秋成はそれまでに書きためていた草稿八十余部を「無益の草紙世にのこさじと、なにやかやとりあつめて」（『文反古』所収森川竹翁宛消息）井戸に投じた。そのあとふつぎれたよう、文章を量産するが、このことに関するでは長島弘明に、著書廃棄以前の著述は、それがたとえ文学的な作品であつても、史書の表側をなぞりながら、その空白部に秋成の歌論・史論を書きこむという方法が守られているが、『春雨物語』を含む、著書廃棄以後の著作には、自在な虚構が取り入れられているという説がある（秋成の著書廃棄）『文学』二〇〇七年五・六月号）。

卓論というべきだが、秋成はその罪意識を完全に処理できなかつた、そのために、『春雨物語』の序および『海賊』・『二世の縁』・『樊噲』などに、著書廃棄をしても整理しきれない意識が反映することになつたと私は解している。登場人物の海賊の貫之批判は結局秋成自身に帰つてくるのである。『海賊』・『二世の縁』については拙著『秋成考』を参照されたく、「樊噲」については「秋成における「いつはり」の問

題——『春雨物語』を中心に」（『日本研究』第十三号、高麗大学日本研究センター、二〇一〇年二月）を参照されたい。

秋成にとつて古今集とは、「いつはり」を肯定して構築された美の世界であつた。「いつはり」の妙を知つたためにこれを完全に否定することはできなかつた秋成は、その美の世界の構築者である貫之の書いた仮名序を鏡として、何度も自らの倫理意識を照らしたのである。

〔いしくら・よういち 大阪大学教授〕